

基本計画書

基本計画										
事項	記入欄							備考		
計画の区分	大学院の設置									
フリガナ設置者	ガッコウホウジツ ツツキカクエン 学校法人 都築学園									
フリガナ大学の名称	ダイイチヤクガクイカクダイン 第一薬科大学 大学院 (Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Daiichi University of Pharmacy)									
大学本部の位置	福岡県福岡市南区玉川町22番1号									
大学院の目的	建学の精神である「個性の伸展による人生練磨」を教育理念とし、薬学の学術理論及び応用を教授研究し、高度の専門性が求められる職業を担うための深い学識及び卓越した能力を培い、文化の進展に寄与するとともに、漢方薬と西洋薬を組み合わせて行う「統合医療」を進化、発展させることにより医療・福祉の向上に貢献することを目的とする。									
新設学部等の目的	【薬学専攻 博士課程】 「薬」に関する深い専門的知識・技術を身につけ、基礎薬学及び臨床薬学に関する研究活動を自立して遂行し、新たな課題を見出して、それに取り組むことができる高度な研究能力を有するとともに、最新の研究機器と最先端技術を駆使して西洋薬及び「補完・代替医療」の中核となる漢方薬や伝統薬の作用機序を解明する研究を通して、「統合医療」を実践できる薬学教育者あるいは薬学研究者の育成を目的とする。									
概要	研究科の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	開設時期及び開設年次	所在地	【基礎となる学部・学科】 薬学部 薬学科 漢方薬学科	
	薬学研究科 [Graduate School of Pharmaceutical Sciences]	年	人	年次人	人	博士 (薬学) [Doctor of Philosophy in Pharmaceutical Sciences]	令和3年4月 第1年次	福岡市南区玉川町22番1号		
	薬学専攻(博士課程) [Doctoral Course in Division of Pharmaceutical Sciences]	4	2		8					
計			2		8					
同一設置者内における変更状況（定員の移行、名称の変更等）										
教育課程	名称		開設する授業科目の総数				卒業要件単位数			
			講義	演習	実験・実習	計				
		薬学研究科薬学専攻(博士課程)	19科目	1科目	1科目	21科目	30単位			
教員組織の概要	学部等の名称			専任教員等					兼任教員等	
				教授	准教授	講師	助教	計	助手	
				人	人	人	人	人	人	
	新設	薬学研究科薬学専攻(博士課程)		17 (17)	9 (9)	2 (2)	- (-)	28 (28)	- (-)	- (-)
	分	計		17 (17)	9 (9)	2 (2)	- (-)	28 (28)	- (-)	- (-)
既	—		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
の	—		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
設	—		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
概	計		- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	- (-)	
要	合計		17 (17)	9 (9)	2 (2)	- (-)	28 (28)	- (-)	- (-)	

教員以外の職員の概要	職 種		専 任	兼 任	計	大学全体			
	事 務 職 員		33 (31)	0 (0)	33 (31)				
	技 術 職 員		6 (6)	0 (0)	6 (6)				
	図 書 館 専 門 職 員		3 (3)	0 (0)	3 (3)				
	そ の 他 の 職 員		5 (5)	0 (0)	5 (5)				
計		47 (45)	0 (0)	47 (45)					
校 地 等	区 分	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	大学全体			
	校 舎 敷 地	17,474 m ²	0 m ²	0 m ²	17,474 m ²				
	運 動 場 用 地	35,354 m ²	0 m ²	0 m ²	35,354 m ²				
	小 計	52,828 m ²	0 m ²	0 m ²	52,828 m ²				
	そ の 他	3,383 m ²	0 m ²	0 m ²	3,383 m ²				
合 計	56,211 m ²	0 m ²	0 m ²	56,211 m ²					
校 舎	専 用	共 用	共用する他の学校等の専用	計	名称：学校法人都築学園福岡第一高等学校と共用 収容定員：2,280人 面積基準：10,560m ²				
	22,122 m ² (22,122 m ²)	509 m ² (509 m ²)	0 m ² (0 m ²)	22,631 m ² (22,631 m ²)					
教室等	講義室	演習室	実験実習室	情報処理学習施設	語学学習施設	大学全体			
	28室	1室	14室	4室 (補助職員 1人)	0室 (補助職員 人)				
専 任 教 員 研 究 室	新設学部等の名称			室 数		大学全体			
	薬学研究科薬学専攻(博士課程)			19 室					
図 書 ・ 設 備	新設学部等の名称	図書 〔うち外国書〕 冊	学術雑誌 〔うち外国書〕 種	電子ジャーナル 〔うち外国書〕	視聴覚資料 点	機械・器具 点	標本 点	研究科単位での算出不能のため、看護学部専用を除く大学全体の数	
	薬学研究科薬学専攻(博士課程)	80,935 [34,534] (80,935 [34,534])	1,044 [467] (1,044 [467])	1,966 [1,966] (1,966 [1,966])	124 (124)	0 (0)	0 (0)		
	計	80,935 [34,534] (80,935 [34,534])	1,044 [467] (1,044 [467])	1,966 [1,966] (1,966 [1,966])	124 (124)	0 (0)	0 (0)		
図 書 館	面積		閲覧座席数		収 納 可 能 冊 数		大学全体		
	1,233 m ²		280席		105,722				
体 育 館	面積		体育館以外のスポーツ施設の概要						
	2,808 m ²		—						
経 費 の 見 積 り 及 び 維 持 方 法 の 概 要	区 分	開設前年度	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次	研究科単位での算出不能のため、薬学部との合計 図書購入費には電子ジャーナル・データベース使用料を含む。
		教員1人当り研究費等	400千円	400千円	400千円	400千円	—千円	—千円	
		共同研究費等	0千円	0千円	0千円	0千円	—千円	—千円	
		図書購入費	21,500千円	21,500千円	21,500千円	21,500千円	—千円	—千円	
	設備購入費	0千円	0千円	12,870千円	0千円	0千円	—千円	—千円	
学生1人当り納付金	第1年次	第2年次	第3年次	第4年次	第5年次	第6年次			
1,300千円		900千円	900千円	900千円	—千円	—千円			
学生納付金以外の維持方法の概要		雑収入等							
既 設 大 学 等 の 状 況	大 学 の 名 称		第一薬科大学						
	学 部 等 の 名 称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度	所在地
		年	人	年次人	人		倍		
	薬学部 薬学科	6	113	—	738	学士(薬学)	0.96	昭和35年度	福岡県福岡市南区 玉川町22番1号
	漢方薬学科	6	60	—	300	学士(薬学)	0.77	平成18年度	
看護学部 看護学科	4	80	—	80	学士(看護学)	—	平成28年度 令和2年度	平成28年度入学定員減(△60) 平成28年度学科設置(60) 令和2年度学科設置(80)	

既設大学等の状況	大学の名称	日本薬科大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		所在地
		年	人	年次人	人		倍			
	薬学部 薬学科 医療ビジネス薬科学科	6 4	260 90	— —	1560 360	学士(薬学) 学士(医療ビジネス薬科学)	1.02 1.03 0.97	平成16年度 平成23年度 平成23年度		埼玉県北足立郡伊奈町小室10281 東京都文京区湯島3-15-9
大学院 薬学研究科薬学専攻	4	3	0	12	博士(薬学)	—	令和2年度	埼玉県北足立郡伊奈町小室10281	令和2年度大学院設置(3)	
既設大学等の状況	大学の名称	神戸医療福祉大学								
	学部等の名称	修業年限	入学定員	編入学定員	収容定員	学位又は称号	定員超過率	開設年度		所在地
		年	人	年次人	人		倍			
	人間社会学部 健康スポーツコミュニケーション学科 社会福祉学科 経営福祉ビジネス学科	4 4 4	150 120 130	— — —	450 660 490	学士(健康福祉学) 学士(社会福祉学) 学士(社会福祉学)	0.71 0.76 0.46 1.06	平成12年度 平成23年度 平成25年度 平成23年度		兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5 大阪府大阪市天王寺区烏ヶ辻2-1-4
附属施設の概要	名称：第一薬科大学薬用植物園 目的：薬学に係る教育・研究のため 規模等：土地883.05㎡ 所在地：福岡県福岡市南区玉川町22番1号									

教育課程等の概要														
（薬学研究科薬学専攻博士課程）														
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手	
共通科目	研究倫理特論	1前	1			○			6	1				オムニバス
	漢方薬特論	1前	1			○			2	1				オムニバス
	統合医療特論	1後	1			○			4					オムニバス
	大学院特別講義	1	1	—	—	○			8			—	—	オムニバス
	薬学演習	1～4	4				○		14	2				—
	課題研究	1～4	18					○	17	9	2			—
	小計（6科目）	—	26	—	—				17	9	2	—	—	
基礎薬学領域科目	創薬化学特論	1前		1		○			1					—
	分子薬理学特論	1前		1		○			1	1				オムニバス
	医薬機器分析学特論	1後		1		○			2		1			オムニバス
	天然物創薬化学特論	2前	—	1	—	○	—	—	1			—	—	—
	代謝制御学特論	2前		1		○			1	1				オムニバス
	分子病態解析学特論	2後		1		○			1	1				オムニバス
	生体物理化学特論	2後		1		○				2				オムニバス
小計（7科目）	—		7					7	5	1				
臨床薬学領域科目	臨床衛生薬学特論	1前		1		○			1	1				オムニバス
	臨床生薬学特論	1前		1		○			1					—
	臨床応用薬理学特論	1後		1		○			1					—
	臨床薬物治療学特論	1後		1		○			1		1			オムニバス
	臨床薬剤設計学特論	2前	—	1	—	○	—	—	1	1		—	—	オムニバス
	臨床薬物動態学特論	2前		1		○			1					—
	臨床薬物送達学特論	2後		1		○			1					—
	地域医療薬学特論	2後		1		○			2	1				オムニバス
小計（8科目）			8					9	3	2				
合計（21科目）		—	26	15	—				17	9	2	—	—	
学位又は称号	博士（薬学）		学位又は学科の分野				薬学関係							
卒業要件及び履修方法							授業期間等							
大学院に原則として4年以上在学し、必修科目26単位、選択科目4単位以上、合計30単位以上修得しなければならない。課題研究の口頭発表を経て、提出された学位論文の所定の審査を受け、合格したものを修了（卒業）と認める。							1 学年の学期区分				2期			
							1 学期の授業期間				15週			
							1 時限の授業時間				90分			

(注)

- 1 学部等，研究科等若しくは高等専門学校等の学科の設置又は大学における通信教育の開設の届出を行おうとする場合には，授与する学位の種類及び分野又は学科の分野が同じ学部等，研究科等若しくは高等専門学校等の学科（学位の種類及び分野の変更等に関する基準（平成十五年文部科学省告示第三十九号）別表第一備考又は別表第二備考に係るものを含む。）についても作成すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校等の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合，大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は，この書類を作成する必要はない。
- 3 開設する授業科目に応じて，適宜科目区分の枠を設けること。
- 4 「授業形態」の欄の「実験・実習」には，実技も含むこと。

教育課程等の概要															
(薬学部薬学科)															
科目区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必修	選択	自由	講義	演習	実験・実習	教授	准教授	講師	助教	助手		
教養科目	文学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	文学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	福祉学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	福祉学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	倫理学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	倫理学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	経済学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	経済学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	法学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	法学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	哲学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	哲学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	英会話Ⅰ	1前		1		○									兼1
	英会話Ⅱ	1後		1		○									兼1
	中国語Ⅰ	1前		1		○									兼1
	中国語Ⅱ	1後		1		○									兼1
	フランス語Ⅰ	1前		1		○									兼1
	フランス語Ⅱ	1後		1		○									兼1
	心理学	1前	1			○									兼1
	情報処理演習Ⅰ	1前	1				○								兼1
	情報処理演習Ⅱ	1後	1				○								兼1
	薬学基礎英語Ⅰ	1前	1			○									兼1
	薬学基礎英語Ⅱ	1後	1			○									兼1
	薬学英语	2前	1			○									兼2
	臨床薬学英语	4前	1			○									兼2
	基礎物理学	1前	1			○				1					兼1
	基礎化学Ⅰ	1前	1			○									兼1
	基礎化学Ⅱ	1後	1			○									兼1
	基礎生物学	1後	1			○					1				兼1
	基礎数学Ⅰ	1前	1			○							1		兼1
	基礎数学Ⅱ	1後	1			○							1		兼1
	基礎統計学	2前	1			○							1		兼1
	文章表現論	1後	1			○									兼1
	プレゼンテーション論	2前	1			○									兼2
	コミュニケーション論	1前	1			○									兼2
	薬学への招待	1前	0.5			○				1					
小計 (36科目)	—	—	17.5	18		—			1	1	1	1		兼21	
専門教育科目	基本事項	医療概論	1通	1.5			○								兼12
		生命・医療倫理学	1後	1			○								兼1
		医療コミュニケーション学	2前	1			○								兼1
		薬事関係法規・制度	4前	1.5			○								兼3
		ポスト教育	5～6	1.5				○		1		2	2		兼3
	小計 (5科目)	—	—	6.5			—		1	0	2	2		兼19	
	薬学基礎(物理分析系)	理論化学	1後	1.5			○								兼1
		物理化学Ⅰ	2前	1.5			○				1				
		物理化学Ⅱ	2後	1.5			○				1				
		物理化学Ⅲ	3前	1.5			○				1				
		放射化学	2後	1.5			○				1				
		分析化学Ⅰ	2前	1.5			○								兼1
		分析化学Ⅱ	2後	1.5			○								兼1
		分析化学Ⅲ	3前	1.5			○								兼1
分析化学Ⅳ		3後	1.5			○								兼1	
小計 (9科目)	—	—	13.5			—			2	0	0		兼3		
薬学基礎(化学系)	有機化学Ⅰ	1前	1			○				1					
	有機化学Ⅱ	1後	1			○				1					

専門 教育 科目	薬学基礎 (化学・生薬系)	有機化学Ⅲ	2前	1			○			1								兼1	
		有機化学Ⅳ	2後	1			○			1								兼1	
		有機化学Ⅴ	3前	1			○												兼1
		有機化学Ⅵ	3後	1			○												兼1
		無機化学	2前	1			○												兼1
		医薬品化学Ⅰ	3後	1.5			○												兼1
		医薬品化学Ⅱ	4前	1.5			○												兼1
		薬用資源学	1前	1.5			○												兼1
		生薬学	2後	1.5			○												兼1
		天然物化学	3後	1.5			○												兼1
	小計 (12科目)	—	14.5					—		1	1	0	0					兼7	
	薬学基礎 (生物系)	機能形態学Ⅰ	1後	1.5			○						1						兼1
		機能形態学Ⅱ	2前	1.5			○							1					
		生命科学Ⅰ	2前	1.5			○						1						
		生命科学Ⅱ	2後	1.5			○						1						
		生命科学Ⅲ	3前	1.5			○				1								
		生命科学Ⅳ	3後	1.5			○				1								
		微生物学Ⅰ	2前	1.5			○				1								
		微生物学Ⅱ	2後	1.5			○												
		免疫学	3前	1.5			○				1								
	小計 (9科目)	—	13.5					—		2	1	1	0					兼1	
	衛生薬学	環境衛生学Ⅰ	2後	1.5			○				1								兼1
		環境衛生学Ⅱ	3前	1.5			○					1							
		食品衛生学Ⅰ	3前	1.5			○				1								
		食品衛生学Ⅱ	3後	1.5			○				1								
		公衆衛生学	3後	1.5			○						1						
小計 (5科目)	—	7.5					—		1	1	1	0							
基礎医療系	薬理学Ⅰ	2前	1.5			○												兼1 兼1	
	薬理学Ⅱ	2後	1.5			○													
	薬理学Ⅲ	3前	1.5			○				1									
	薬理学Ⅳ	3後	1.5			○				1									
	小計 (4科目)	—	6					—		1	0	0	0						兼2
医療薬学 (臨床)	病態・薬物治療学Ⅰ	2後	1.5			○												兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼3 兼3 ※実習 兼13 兼13 兼8 兼1	
	病態・薬物治療学Ⅱ	3前	1.5			○				1									
	病態・薬物治療学Ⅲ	3前	1.5			○				1									
	病態・薬物治療学Ⅳ	3後	1.5			○													
	病態・薬物治療学Ⅴ	4前	1.5			○													
	感染症治療学	3後	1.5			○				1									
	がん化学療法学	4前	1.5			○				1									
	臨床薬物動態学	4前	1			○				1									
	漢方治療論	4前	1.5			○													
	医療統計学	2後	1.5			○				1									
	医薬品情報学	4前	1			○													
	薬物動態学Ⅰ	3後	1.5			○				1									
	薬物動態学Ⅱ	4前	1.5			○				1									
	早期臨床体験	1~2	1.5			○				1		1	2						
	調剤学	3後	1.5			○						1							
	事前学習	4通	4					○		2	3	1	1						
	実務実習Ⅰ	4~5	10					○		10	4	3	2						
	実務実習Ⅱ	4~5	10					○		10	4	3	2						
	小計 (18科目)	—	45.5					—		11	4	3	2						兼8
	薬劑・製劑系	物理薬劑学	3前	1.5			○												
製剤学Ⅰ		3前	1.5			○				1									
製剤学Ⅱ		3後	1			○				1									
小計 (3科目)	—	4					—		2	0	0	0							
薬学研究	卒業研究	4~6	13					○		10	1							兼7	
	小計 (1科目)	—	13					—		11	0	0	0						
アドバンス ト科目	デュケイン大学講師特別講義	1		0.5			○											兼1	
	介護学概論	2後	1			○												兼1	
	臨床心理学	2前	1			○												兼1	
	薬学演習	4後	6			○				7	4	1	2					兼6 オムニバス	
	診療科別治療論	5後	1.5			○				1								兼8 オムニバス	
	処方解析学	6前	1			○				1								兼1	
医薬品開発論	6前	1			○												兼1		

専門教育科目	アドバンスト科目	地域薬局論	6前	1			○										兼1		
		臨床物理分析法	6前		1			○										兼1	
		ターミナルケア論	6前		1			○										兼1	
		疾患治療特論	6前		1			○										兼10 オムニバス	
		救急医療概論	6前		1			○										兼10 オムニバス	
		健康管理学	6前		1			○						1				兼1	
		薬学総合演習	6通	6				○			15	7		3				兼2 オムニバス	
		病院薬学実習	5～6		2						1							兼1 オムニバス ※演習	
		薬局薬学実習	5～6		2						2							オムニバス ※演習	
		伝統医療薬学実習	5～6		2													兼2 オムニバス ※演習	
		海外医療研修	5～6		2													兼3 オムニバス ※演習	
		学内研修	5～6		2						1							兼1 オムニバス ※演習	
		小計 (19科目)		—	18.5	15.5			—		15	7	4						兼52
		実習科目	基礎実習	2前	1.5					○					5				兼5
化学系実習	2後		1.5					○	2	1			1				兼3		
物理系実習	2後		1.5					○	1	2							兼3		
生物系実習	3前		1.5					○	3				2				兼1		
衛生薬学実習	3前		1.5					○	1	1							兼1		
薬理学実習	3後		1.5					○	2			1	2				兼1		
薬剤学実習	4前		1					○	2			1					兼2		
小計 (7科目)			—	10			—		11	4	2	5					兼11		
演習科目	有機化学演習	2後	1				○				1								
	物理系演習	3前	1				○										兼1		
	構造解析演習	3後	1				○										兼1		
小計 (3科目)		—	3			—		0	1	0	0					兼1			
合計 (131科目)			—	173	33.5		—												
学位又は称号		学士 (薬学)		学位又は学科の分野				薬学関係											
卒業要件及び履修方法							授業期間等												
<small> 教養科目については、必修科目全てと人文・社会科学系の選択科目から8単位、語学の選択科目から2単位修得すること。専門教育科目については、必修科目全てと5～6年次に配当している実習および研修の5科目から1科目をコ選り6単位を修得し、さらに6年次配当の1単位の選択科目群から3単位を修得すること。教養科目と専門教育科目を合わせて合計188単位以上の単位を修得すること。 </small>							1 学年の学期区分				2 期								
							1 学期の授業期間				1 5 週								
							1 時限の授業時間				9 0 分								

別記様式第2号（その2の1）

教 育 課 程 等 の 概 要															
(薬学部漢方薬学科)															
科目 区分	授業科目の名称	配当年次	単位数			授業形態			専任教員等の配置					備考	
			必 修	選 択	自 由	講 義	演 習	実 験・ 実習	教 授	准 教 授	講 師	助 教	助 手		
教 養 科 目	文学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	文学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	福祉学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	福祉学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	倫理学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	倫理学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	経済学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	経済学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	法学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	法学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	哲学Ⅰ	1前		1		○									兼1
	哲学Ⅱ	1後		1		○									兼1
	英会話Ⅰ	1前		1		○					1				
	英会話Ⅱ	1後		1		○					1				
	中国語Ⅰ	1前		1		○									兼1
	中国語Ⅱ	1後		1		○									兼1
	フランス語Ⅰ	1前		1		○									兼1
	フランス語Ⅱ	1後		1		○									兼1
	心理学	1前	1			○									兼1
	情報処理演習Ⅰ	1前	1				○								兼1
	情報処理演習Ⅱ	1後	1				○								兼1
	薬学基礎英語Ⅰ	1前	1			○					1				
	薬学基礎英語Ⅱ	1後	1			○					1				
	薬学英語	2前	1			○				1					
	臨床薬学英語	4前	1			○				1					
	基礎物理学	1前	1			○									兼1
	基礎化学Ⅰ	1前	1			○						1			
	基礎化学Ⅱ	1後	1			○						1			
	基礎生物学	1後	1			○									兼1
	基礎数学Ⅰ	1前	1			○									兼1
	基礎数学Ⅱ	1後	1			○									兼1
	基礎統計学	2前	1			○									兼1
	文章表現論	1後	1			○									兼1
プレゼンテーション論	2前	1			○									兼1	
コミュニケーション論	1前	1			○									兼2	
薬学への招待	1前	0.5			○									兼1	
小計 (36科目)		—	17.5	18		—				2	2			兼14	
基 本 事 項	医療概論	1通	1.5			○			1					兼12	オムニバス
	生命・医療倫理学	1後	1			○								兼1	
	医療コミュニケーション学	2前	1			○								兼1	
	薬事関係法規・制度	4前	1.5			○				1				兼2	
	ポスト教育	5～6	1.5				○		2	1				兼7	
	小計 (5科目)	—	6.5			—			2	1				兼9	
専 門 教 育 科 目	薬学基礎 (物理分析系)														
	理論化学	1後	1.5			○				1				兼1	
	物理化学Ⅰ	2前	1.5			○								兼1	
	物理化学Ⅱ	2後	1.5			○								兼1	
	物理化学Ⅲ	3前	1.5			○								兼1	
	放射化学	2後	1.5			○								兼1	
	分析化学Ⅰ	2前	1.5			○			1						
	分析化学Ⅱ	2後	1.5			○				1					
	分析化学Ⅲ	3前	1.5			○			1						
分析化学Ⅳ	3後	1.5			○			1							
小計 (9科目)	—	13.5			—			3	1	0	0		兼4		
薬 学 基 礎 系 (薬学・生薬系)	有機化学Ⅰ	1前	1			○								兼1	
	有機化学Ⅱ	1後	1			○								兼1	
	有機化学Ⅲ	2前	1			○								兼1	
	有機化学Ⅳ	2後	1			○								兼1	

専門教育科目	薬学基礎 (化学・生薬系)	有機化学V	3前	1			○			1				兼1 兼1
		有機化学VI	3後	1			○			1				
		無機化学	2前	1			○					1		
		医薬品化学I	3後	1.5			○							
		医薬品化学II	4前	1.5			○							
		薬用資源学	1前	1.5			○				1			
		生薬学	2後	1.5			○			1				
		天然物化学	3後	1.5			○			1				
		小計(12科目)	—	14.5			—			3	1	1	0	
	薬学基礎 (生物系)	機能形態学I	1後	1.5			○							兼3 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1
		機能形態学II	2前	1.5			○							
		生命科学I	2前	1.5			○							
		生命科学II	2後	1.5			○							
		生命科学III	3前	1.5			○							
		生命科学IV	3後	1.5			○							
		微生物学I	2前	1.5			○							
		微生物学II	2後	1.5			○				1			
		免疫学	3前	1.5			○							
小計(9科目)	—	13.5			—			0	1	0	0			
衛生薬学	環境衛生学I	2後	1.5			○							兼1 兼1 兼1 兼1 兼1	
	環境衛生学II	3前	1.5			○								
	食品衛生学I	3前	1.5			○								
	食品衛生学II	3後	1.5			○								
	公衆衛生学	3後	1.5			○								
小計(5科目)	—	7.5			—			0	0	0	0			
基礎医療系	薬理学I	2前	1.5			○			1				兼1 兼1 兼1	
	薬理学II	2後	1.5			○			1					
	薬理学III	3前	1.5			○								
	薬理学IV	3後	1.5			○								
小計(4科目)	—	6			—			1	0	0	0			
医療薬学 (臨床)	病態・薬物治療学I	2後	1.5			○			1				兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1 兼1	
	病態・薬物治療学II	3前	1.5			○								
	病態・薬物治療学III	3前	1.5			○								
	病態・薬物治療学IV	3後	1.5			○					1			
	病態・薬物治療学V	4前	1.5			○			1					
	感染症治療学	3後	1.5			○								
	がん化学療法学	4前	1.5			○								
	臨床薬物動態学	4前	1			○								
	漢方治療論	4前	1.5			○				1				
	医療統計学	2後	1.5			○								
	医薬品情報学	4前	1			○			1					
	薬物動態学I	3後	1.5			○								
	薬物動態学II	4前	1.5			○								
	早期臨床体験	1～2	1.5			○			2	1				
	調剤学	3後	1.5			○								
	事前学習	4通	4					○	2	1				
	実務実習I	4～5	10						5	6	2			
	実務実習II	4～5	10						5	6	2			
小計(18科目)	—	45.5			—			9	5	2	3			
薬劑・製劑系	物理薬劑学	3前	1.5			○				1			兼1 兼1 兼2	
	製劑学I	3前	1.5			○								
	製劑学II	3後	1			○								
小計(3科目)	—	4			—			0	1	0	0			
薬学研究	卒業研究	4～6	13					○	6	1			兼11	
	小計(1科目)	—	13			—			3	0	0	0		
アドバンス スト科目	デュケイン大学講師特別講義	1		0.5		○							兼1 兼14 オムニバス 兼9 オムニバス 兼1	
	本草学	1前	1			○			1					
	漢方・民間薬概論	1後	1			○			1					
	漢方薬理学	2前	1			○			1					
	漢方薬効免疫学	2後	1			○			1					
	漢方製劑・薬劑学	3前	1			○					1			
	漢方処方学	5後	1			○			1					
	臨床漢方治療学	6前	1			○			1					
	薬学演習	4後	6			○			4	2				
	診療科別治療論	5後	1.5			○								
	処方解析学	6前		1		○								

	医薬品開発論	6前	1		○			1					兼1
	地域薬局論	6前	1		○								
	臨床物理分析法	6前	1		○			1					
	ターミナルケア論	6前	1		○								兼1
	疾患治療特論	6前	1		○						1		兼9 オムニバス
	救急医療概論	6前	1		○								兼10 オムニバス
	健康管理学	6前	1		○						1		兼1
	薬学総合演習	6通	6		○			3					兼3 オムニバス
	病院薬学実習	5～6	2				○	1					兼1 オムニバス ※演習
	薬局薬学実習	5～6	2				○						兼2 オムニバス ※演習
	伝統医療薬学実習	5～6	2				○	2					オムニバス ※演習
	海外医療研修	5～6	2				○		2		1		オムニバス ※演習
	学内研修	5～6	2				○	1					兼1 オムニバス ※演習
	小計 (24科目)	—	20.5	18.5			—	12	5	1	3		兼62
実習科目	基礎実習	2前	1.5				○	1		2	2		兼5
	化学系実習	2後	1.5				○	1	1	1			兼4
	物理系実習	2後	1.5				○	2			1		兼3
	生物系実習	3前	1.5				○		1				兼5
	衛生薬学実習	3前	1.5				○				1		兼2
	薬理学実習	3後	1.5				○		1				兼5
	薬剤学実習	4前	1				○	1		1			兼3
	小計 (7科目)	—	10				—	4	3	2	3		兼22
演習科目	有機化学演習	2後	1			○							兼1
	物理系演習	3前	1			○		1					
	構造解析演習	3後	1			○		1					
	小計 (3科目)	—	3			—		1	0	0	0		兼1
合計 (136科目)		—	175	36.5			—						
学位又は称号		学士 (薬学)		学位又は学科の分野				薬学関係					
卒業要件及び履修方法							授業期間等						
教養科目については、必修科目全てと人文・社会科学系の選択科目から8単位、語学の選択科目から2単位修得すること。専門教育科目については、必修科目全てと5～6年次に配当している実習および研修の5科目から1科目を選び6単位を修得し、さらに6年次配当の1単位の選択科目群から1単位修得すること。教養科目と専門教育科目合わせて合計188単位以上の単位を修得すること。							1学年の学期区分			2期			
							1学期の授業期間			15週			
							1時限の授業時間			90分			

授 業 科 目 の 概 要			
(薬学専攻博士課程)			
科目 区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
共通 科目	必修 科目	<p>研究の成果が公共の福祉に寄与するには、研究者の自由な発想や行動を律するモラルや、ルールに則った研究内容が強く求められる。しかし近年、世間を賑わす事案が数多く報告されていることから、薬学を主導する優れた人材の育成には、研究倫理を体系的に学習することが必修となる。本特論では研究費の運用にはじまり、ヒト・動物を対象とする研究、有効性と安全性の予測・評価、さらには研究成果の公表において、研究倫理上の重要な論点を理解するとともに、研究不正の発生予防と事態への対処についても併せて講義する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：研究倫理について（担当教員:1 松本欣三） ・2回：研究費の獲得と適正使用における倫理について（担当教員:3 原口浩一） ・3回：微生物や遺伝子を対象とした研究倫理について（担当教員:21 小川和加野） ・4回：動物を対象とした研究倫理について（担当教員:10 小松生明） ・5回：ヒトを対象とした研究倫理(規定と運用) について（担当教員:7 小山進） ・6回：ヒトを対象とした研究倫理（計画と同意）について（担当教員:7 小山進） ・7回：医薬品開発とレギュラトリーサイエンスにおける倫理について（担当教員:6 有竹浩介） 	オムニバス方式
共通 科目	必修 科目	<p>漢方医学は、最も論理的、体系的に集大成された伝統医学で、個々人の「証」に照らして処方組まれることから、漢方はテーラーメイド医療の最たるものと言われている。また、漢方では「未病を治す」と言われるように、漢方薬が免疫力を高め、発病を予防する効果を実証された例も多く、予防医学に広く貢献可能であることが分かってきている。さらに、現代医学では「証」を超えて臨床に応用されている処方として、外科領域において「大建中湯」が、癌治療領域において「半夏瀉心湯」が使用されている。また、漢方薬の原料となる生薬は天産物であるがために、品質面において漢方薬の効力の不均一性が危惧され、原料生薬の品質評価が必須不可欠となっている。本講義では、漢方薬を薬理学的に理解し、的確な臨床応用ができることを目的とする。</p> <p>(担当教員:13 森永 紀/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：漢方薬と歴史 ・2回：日本の漢方医学の特徴 ・8回：漢方薬の品質評価 <p>(担当教員:1 松本欣三/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回：漢方薬の作用機構 ・6回：現代医学における漢方薬 ・7回：未病医学における漢方薬 <p>(担当教員:26 久保山友晴/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4回：神経変性疾患と漢方薬 (1) ・5回：神経変性疾患と漢方薬 (2) 	オムニバス方式
共通 科目	必修 科目	<p>西洋医学は、人類の多くの疾患の予防、治療や症状緩和に応用されてきた。一方、いわゆる「統合医療」は、近代西洋医学と相補（補完）・代替療法や伝統医学等とを組み合わせる療法であり、多種多様なものが存在する。「伝統医療」はそれぞれの文化に根付いた理論・信心・経験に基づく知見、技術および実践の総和であり、健康を保持し、心身の病気を予防、診断、改善、治療することを目的としている。統合医療は、近代西洋医学を前提として、相補（補完）・代替療法や伝統医学等を組み合わせるさらにQOLを向上させる医療であり、医師主導で行うものであり、場合により多職種が協働して行うものと位置づけられている。本講義では、統合医療とは何か、統合医療を行うことのメリットはあるのか、あるとしたらどのようなことか、その実践方法について理解することを目的とする。</p> <p>(担当教員:1 松本欣三/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：統合医療の定義と分類 ・2回：日本における統合医療の現状 <p>(担当教員:6 有竹浩介/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3回：統合医療に関する規制と国の取組 ・4回：統合医療のデータの読み方 <p>(担当教員:7 小山進/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回：現代医療における統合医療の活用例 (1) ・6回：現代医療における統合医療の活用例 (2) <p>(担当教員:4 入倉充/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7回：現代医療における統合医療の活用例 (3) ・8回：海外における統合医療の現状 	オムニバス方式

共通科目	必修科目	大学院特別講義	<p>基礎薬学領域および臨床薬学領域における国内外の外部の招聘講師による特別講演を聴講することで、海外を含む最先端の研究に触れる。積極的な質疑応答を通して研究内容の理解を深めるとともに、国際性を身につける。その内容をレポートにまとめる。</p> <p>講演者の決定は、各々、専門の違う幅広い8領域の分野から招聘し、一つの領域に偏らないように配慮する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：担当教員：1 松本 欣三 ・2回：担当教員：2 戸田 晶久 ・3回：担当教員：15 今井 輝子 ・4回：担当教員：10 小松 生明 ・5回：担当教員：9 長島 史裕 ・6回：担当教員：6 有竹 浩介 ・7回：担当教員：11 門口 泰也 ・8回：担当教員：14 藤井 清永 	オムニバス方式
共通科目	必修科目	薬学演習	<p>選択した課題研究の研究指導員の所属分野において、研究指導教員の指導の下、セミナー形式で実施する。大学院生は、自分の研究成果や調査した最先端の研究動向の発表、他の大学院生や教員の発表を通じた討論をすることにより、課題研究の推進及び研究能力の涵養に努める。基礎薬学領域と臨床薬学領域に分けているが、選択は自由である。</p> <p style="text-align: center;">指導教員：各課題研究代表者</p> <p>基礎薬学領域：門口泰也、小松生明、藤井清永、長島史裕、炬口眞理子、村山恵子、安川圭司、田島健治</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 課題研究「創薬に有用な有機反応の開発研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員の発表に対して議論・討論を行う。担当教員：11 門口泰也 2 課題研究「難治性疼痛に対する新規治療薬の研究」を遂行する上での準備、関連研究の長さ、途中経過等の発表および他の学生や教員の発表を通じた討論を行う。担当教員：10 小松生明 3 課題研究「医学・薬学領域に有用な分析技術の開発とその応用に関する研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員の発表に対して議論・討論を行う。担当教員：14 藤井清永 4 課題研究「創薬リード化合物を指向した天然有機化合物の探索」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員の発表を通じた討論を行う。担当教員：9 長島史裕 5 ある治療薬が患者さんに効果があるかどうか、治療前に予め検査することをコンパニオン診断という。本演習では、「がん治療におけるコンパニオン診断に有用なバイオマーカーや診断薬についての研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員と討論を行う。担当教員：16 炬口眞理子 6 課題研究「生体内微量成分の代謝・制御に関する研究」を遂行する上での準備、国内外の背景とこれに関連する研究の調査、各自の研究の途中経過等を発表し、他の学生や教員と討論を行う。担当教員：5 村山恵子 7 課題研究「生体内のレドックスに関する研究」を遂行する上での準備、国内外の関連研究の調査、途中経過等を発表し、他の学生や教員と討論を行う。担当教員：18 田島健治、19 安川圭司 <p>臨床薬学領域：戸田晶久、森永紀、有竹浩介、小山進、今井輝子、入倉充、有馬英俊、窪田敏夫</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 課題研究「各種難治性疾患の治療・予防に関する衛生薬学的研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、及び他の大学院生や教員との発表を通じた討論を行う。担当教員：2 戸田晶久 2 課題研究「甘草の副作用、偽アルドステロン症の発症予測のための検査キットの開発」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、及び他の大学院生や教員との発表を通じた討論を行う。担当教員：13 森永 紀 3 課題研究「プロスタグランジンD合成酵素タンパク質の3次元立体構造座標に基づいた特異的阻害薬の分子設計と効率的評価による画期的な抗炎症薬の開発と、これを用いた治療法の確立」を遂行するための関連研究の進捗状況の発表、関連最新研究の国内外の動向について調査、討論する。担当教員：6 有竹浩介 4 課題研究「食事の中の栄養成分の相違が中脳報酬系ドーパミン神経系を介した肥満・糖代謝異常を惹起するメカニズム」に関して、国内外の最新の文献を引用しつつ、研究仮説を立て、研究計画の策定を行う。また、予想される研究結果に関して討論する。担当教員：7 小山 進 5 課題研究「難溶性医薬品の易溶化と生体内相互作用に関する薬剤学的研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員の発表を通じた討論を行う。担当教員：15 今井輝子 6 課題研究「小児および新生児における医薬品適正使用および薬剤師職能開発のための臨床薬学的研究」を遂行する。そのために準備、関連研究の現状に関する調査を行う。さらに、研究の進捗状況の発表、および他の学生の研究発表や教員との討論に参加する。担当教員：4 入倉 充 7 課題研究「シクロデキストリンおよびサクランのDDS素材・APIへの有効利用ならびにAIの利活用に関する研究」を遂行するための準備、関連研究の調査、関連法規等の確認を行う。また、学会発表および学術論文作成のために、関連論文の輪読・紹介、AIプログラミング・機械学習ゼミ、研究の進捗状況のプレゼンや他の学生の研究プレゼンに参加するとともに教員との討論を積極的に行う。担当教員：12 有馬英俊 8 課題研究「地域における薬剤師の薬学的管理の有用性に関する研究」を遂行する上での準備、関連研究の調査、途中経過等の発表、および他の学生や教員の発表を通じた討論を行う。担当教員：8 窪田敏夫 	

		<p>各課題研究代表者が掲げる下記の研究課題から一つを選択し、4年間にわたり研究を遂行する。その研究成果は、国内外の学会で発表し、査読付き学術雑誌に投稿することにより、研究の立案、遂行、及び解決・提案の能力を涵養する。</p>	<p>1 課題研究「創薬に有用な有機反応の開発研究」 医薬品合成に必須の有機反応の開発研究を実施する。パラジウムやルテニウム、銅に代表される遷移金属には未知の機能が隠されている。これら遷移金属を有機反応の触媒として駆使することで、工業的な実用化を指向した、高効率で安全性の高い環境負荷低減型反応の開発を目指す。特に、炭素-水素結合の官能基化、脱水素化反応を基盤とする炭素-炭素結合形成反応、窒素や酸素、硫黄などのヘテロ原子導入反応の開発に注力する。 担当教員：11 門口泰也</p> <p>2 課題研究「難治性疼痛に対する新規治療薬の探索研究」 難治性疼痛は、日常生活にも支障をきたすことから、QOL、学習効率および労働生産効率を著しく低下させる。ここでは、薬理学的および神経科学的実験手法を用いて、神経系の可塑性変化に基づくこれら病態メカニズムの解明ならびに治療薬の開発に関する研究を行う。 担当教員：10 小松生明、25 高村雄策</p> <p>3 課題研究「医学・薬学領域に有用な分析技術の開発とその応用に関する研究」 近年の目覚ましい分析技術の革新に伴って、多種多様な分析機器や分析手法の開発がなされている。しかし、高い信頼度で、高精度・高精度の分析結果を得るためには、適切な分析機器の選択や分析手法の最適化が重要となる。本課題研究では、がん、医薬品、食品ならびに環境汚染物質が、人体に与える影響を解析・評価するため、LC-MSやGC-MSを用いて、対象となる物質や関連物質ならびに生体成分やバイオマーカーの定性・定量分析法の最適化を試みる。加えて、確立した手法を用いて、疾患や化学物質による分子的作用メカニズムの解明を目指す。担当教員：14 藤井謙二、23 門口浩一、27 藤井由紀子</p> <p>4 課題研究「医薬品創製を目指した天然医薬シーズの探索」 現在の医薬品開発の多くは、ドラッグデザインを基に開発が行われている。しかし、天然物から単離された有機化合物のなかにも医薬品として、もしくは医薬品のリード化合物として見出されている化合物も多くある。本研究課題は、天然物から医薬品創製に有効なリード化合物もしくは医薬品となりうる有機化合物の発見を目的とし、天然医療資源として有効な天然有機化合物の探索を目指す。担当教員：9 長島史裕</p> <p>5 「がん治療におけるコンパニオン診断構築に向けたバイオマーカーの探索」 近年の新薬ラッシュにより、がん治療における薬剤の選択枝が広がる中、投薬前に薬剤の効果を予測する（コンパニオン診断）バイオマーカーがあれば、患者個々に最適な治療を提供することができ、治療成績の向上は勿論のこと患者の身体的・経済的負担軽減にも繋がる。本課題研究では、主に造血器腫瘍について個々の薬剤の効果予測バイオマーカーを探索し、コンパニオン診断の構築を目指す。担当教員：16 炬口眞理子、21 小川和加野</p> <p>6 課題研究「生体微量成分の代謝・制御に関する研究」 人体は様々な構成成分から成り立ち、それらが密接に関連して、生体のホメオスタシスを保っている。ビタミンや生体微量金属は微量ながら、生命の代謝維持や代謝制御に重要な機能を果たしている。また近年、これら微量成分は従来知られている生理機能だけでなく、新しい機能が発見されたり、単に生体成分不足の補充ではなく、新しい医薬品としての応用なども研究されている。本課題では、ビタミンB1やB6、微量元素の亜鉛を中心として、新しい機能の探求や医薬品開発のための基礎的な研究を行う。担当教員：5 村山恵子、20 廣村 信</p> <p>7 課題研究「生体内のレドックスに関する研究」 生体内の酸化還元(レドックス)はあらゆる病態の発症や合併症への関与が示唆されており、診断のバイオマーカーや創薬標的の候補となりうる。本研究課題では、消化器系炎症などのモデル動物における活性酸素・フリーラジカル産生や酸化防御システムなどのレドックス変動を解析し、発症や合併症との関連を明らかにすることで、診断のバイオマーカーや創薬標的の発掘を目指す。また、細胞内でのレドックス反応に関わるタンパク質について、その分光学的な解析により、その機能を明らかにすることを目指す。担当教員：18 田島健治、19 安川圭司</p>
--	--	---	--

課題研究
(基礎薬学領域)

<p>共通科目</p>	<p>必修科目</p>	<p>課題研究 (臨床薬学領域)</p>	<p>各課題研究代表者が掲げる下記の研究課題から一つを選択し、4年案にわたり研究を遂行する。その研究成果は、国内外の学会で発表し、査読付き学術雑誌に掲載することにより、研究の立案、遂行、及び解決・提案の能力を涵養する。</p> <p>1 課題研究「各種難治性疾患の治療・予防に関する衛生薬学的研究」 糖尿病、アレルギー性疾患、排尿機能障害（過活動膀胱等）、慢性腎疾患、認知症等の様々な難治性疾患の治療・予防に関して、これらの病態機序の分子レベルの解明、食品成分や環境因子の影響、疾患の発症予防や増悪の制御及び栄養管理等の人々の健康維持・増進に貢献する衛生薬学的研究を行う。担当教員：2 戸田晶久、24 副田二三夫</p> <p>2 課題研究「甘草の副作用、偽アルドステロン症の発症予測のための検査キットの開発」 漢方薬が引き起こす副作用のうち、比較的頻度が高く重篤なものとして、偽アルドステロン症があり、その原因物質として、甘草に含まれるグリチルリチン酸の代謝産物である18β-glycyrrhetyl-3-O-sulfate (GA3S) の可能性を見出している。GA3Sが生体内に現れやすい個体差が副作用の発症しやすさと関連があると考えている。そこで、GA3Sに特異的に結合できるモノクローナル抗体を調製し、抗原抗体反応を利用した免疫化学的検出法を原理とする高感度な定量方法の開発を目指す。担当教員：13 森永 紀、1 松本欣三、26 久保山友晴</p> <p>3 課題研究「プロスタグランジンD合成酵素タンパク質の3次元立体構造に基づいた酵素反応機構解析、特異的阻害薬の分子設計と新規抗炎症薬に関する研究」 生理活性脂質のプロスタグランジン (PG) D2 は、慢性炎症、アレルギーあるいは脂肪分化に関与する。2つのPGD合成酵素（造血管型とリポカリン型）タンパク質を高品位結晶化し、X線結晶構造解析によって3次元立体構造を明らかにする。構造に基づいて選択的かつ強力な阻害薬を理論設計し、これを用いて新規な抗炎症薬や抗肥満薬を創製する。担当教員：6 有竹浩介</p> <p>4 課題研究「脂肪-脳連関を軸とした食行動制御と肥満に関する研究」 脂肪組織から分泌される種々のアディポカインが脳内ドパミン食報酬系中枢とどのような連関機序を介して肥満を惹起するのかを、肥満モデル動物を作製して研究する。肥満モデル動物の食行動は、行動学的解析で検討する。種々のアディポカインとドパミンの脳内食報酬系中枢における連関を、肥満モデル動物の脳スライス標本を用いて電気生理学的、薬理的に解析する。担当教員：7 小山進、28 山脇洋輔</p> <p>5 課題研究「新規人工調製肺サーファクタントの開発研究と経肺DDSへの応用展開」 界面活性剤、脂質、並びにタンパク質の物理化学的性質やその生体内での役割・機能を系統的に精査・解析する。特に「生体界面化学」をキーワードとして、生体膜あるいはそのモデルを用い、各種分子集合体の形成・崩壊メカニズムを解明することを目的とする。本課題研究を通して、物理薬剤学の研究遂行に必要な実践的基礎力（実験遂行能力、問題解決能力、プレゼンテーション能力等）を養うと共に、柔軟な科学的及び論理的思考を携えた薬剤師及び薬学研究者としての技能・知識を修得する。担当教員：15 今井輝子、23 中原広道</p> <p>6 課題研究「新生児・乳児における未承認および適応外使用医薬品問題解決のための研究」 我が国の新生児および乳児領域で使用される医薬品の約70%が未承認あるいは適応外使用医薬品である。この問題の原因を調査し、明らかにすることにより、問題解決のための方策を提案する。さらにその方策を実践することにより、新生児および乳児領域の医療へ貢献する。担当教員：4 入倉 充</p> <p>7 課題研究「シクロデキストリン・サクランの医薬への応用と人工知能 (AI) の利活用」 健康長寿社会の実現を目指して、様々な創薬モダリティの開発が行われている。これら多様な創薬モダリティを優れた医薬品に仕立て上げるためには、革新的な製剤及びドラッグ・デリバリーシステム (DDS) の開発が必要である。シクロデキストリンやサクランのようなオリゴ糖・多糖は、優れたDDS素材としてだけでなく、それ自体が医薬品・化粧品・サプリメントとしてヒトの健康に有益な作用を及ぼす。そこで本課題研究では、人工知能 (AI) 技術を活用し、シクロデキストリンやサクランに分子修飾や超分子形成を施すことにより、新たな機能を有するDDS・化粧品・サプリメント素材としての有用性を見出し、健康・医療に資するシーズ開発を目指すものである。担当教員：12 有馬英俊</p> <p>8 課題研究「地域における薬剤師の薬学的管理の有用性に関する研究」 医療において薬剤師の業務に対するエビデンスの重要性が増してきている。そのため、本課題では薬剤師が在宅、かかりつけ薬局などを通して提供する薬学的管理の有用性の評価を行うため、現場の薬剤師と協力し、アンケートや評価表などを用いた疫学研究を行う。担当教員：8 窪田敏夫、17 首藤英樹、22 大光正男</p>	
-------------	-------------	--------------------------	--	--

(注)

- 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 私立の大学若しくは高等専門学校に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(薬学専攻博士課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
基礎薬学領域科目	選択科目 創薬化学特論	<p>分子設計した化合物を自在に構築・合成する反応・技術の開発は創薬に携わる有機合成化学者の課題であり、反応の精密な制御により初めて達成される。</p> <p>有機マグネシウム化合物(グリニャール試薬)や有機リチウム化合物、有機亜鉛化合物に代表される、典型金属元素を含む有機金属化合物は、精密有機合成化学の中軸を担う試薬であり、これまでに多様な有機反応を可能にしてきた。最近では求電子性官能基を有する有機典型金属化合物も開発され、有機合成における適用性は益々向上している。また、パラジウムやルテニウム、白金などの遷移金属を含有する触媒はこれまでの有機化学の常識を打ち破る新反応発見の可能性を秘めている。本講義では、有機金属化学と遷移金属触媒に焦点を当て、有機金属化学の開発の歴史から、有機金属試薬の化学構造、調製法および有機合成への適用、また遷移金属元素の有機反応の触媒としての機能について、基本的な考え方を明示し、最近の進歩について概説する。</p> <p>(担当教員:11 門口泰也/8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:有機金属化学(1):有機金属化学の歴史(1) ・2回:有機金属化学(2):有機金属化学の歴史(2) 有機リチウム化合物 ・3回:有機金属化学(3):有機マグネシウム化合物 ・4回:有機金属化学(4):有機亜鉛化合物 有機銅化合物 ・5回:遷移金属触媒(1):酸化還元反応 ・6回:遷移金属触媒(2):クロスカップリング反応(1) ・7回:遷移金属触媒(3):クロスカップリング反応(2) オレフィンメタセシス ・8回:遷移金属触媒(4):炭素-水素活性化反応 	
基礎薬学領域科目	選択科目 分子薬理学特論	<p>薬学において治療に根ざした薬を開発するには、その病態を分子レベルから統合的に理解し、かつ明らかにする必要がある。そこで、本領域では、現在、問題視されている慢性疼痛、精神神経疾患および腫瘍などの生理・病態を学び、それらの治療法・薬物療法のアルゴリズムを理解し、新たな治療法を開発する研究手法についての授業を行う。</p> <p>(担当教員:10 小松生明/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:疼痛の種類とその伝達機構 ・2回:難治性疼痛の発症メカニズムとその治療薬 ・3回:モルヒネ鎮痛耐性と依存性の形成メカニズム ・8回:総合討論 <p>(担当教員:25 高村雄作/5回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4回:自閉症・統合失調症の病態と治療薬 ・5回:アルツハイマー型認知症の病態と治療薬 ・6回:うつ病の病態と治療薬 ・7回:腫瘍疾患の病態と腫瘍発生メカニズムとその治療薬 ・8回:総合討論 	オムニバス方式
基礎薬学領域科目	選択科目 医薬機器分析学特論	<p>近年の機器分析の目覚ましい技術革新は、医学・薬学領域の発展に大きく貢献している。それに伴って、多種多様な機器や分析手法が開発されている。薬学研究者として、目的とする分析に対して、適した機器や分析手法の選択が重要であり、主要な機器分析の原理や利用方法を習得する必要がある。本特論では、医薬品、生体成分、食品ならびに環境物質にかかわる主要な機器分析の原理について理解を深め、その応用例について学ぶ。</p> <p>(担当教員:27 藤井由希子/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:分光分析の原理と応用 ・5回:ガスクロマトグラフィー質量分析(GC-MS)法の原理と応用 <p>(担当教員:3 原口浩一/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2回:質量分析 ・3回:クロマトグラフィー ・4回:核磁気共鳴スペクトル測定(NMR) <p>(担当教員:14 藤井清永/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・6回:各種液体クロマトグラフィー質量分析(LC-MS)法と定性・定量分析について ・7回:LC-MSを用いた薬物動態研究・プロテオミクスへの応用について ・8回:多次元NMR測定法と構造生物学研究への応用について 	オムニバス方式

基礎薬学領域科目	選択科目	天然物創薬化学特論	<p>医薬品創製は、ドラッグデザイン等をもとに多くの医薬品開発が行われているが、天然有機化合物をリード化合物として開発される医薬品もある。動植物等の天然物から実際に医薬品のリード化合物となりうる物質の抽出、単離方法、精製した化合物の構造解析、および単離した化合物の生物活性試験により新たなリード化合物の探索方法について理解することを目的とする。</p> <p>(担当教員:9 長島史裕/8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:天然物を基礎として開発された医薬品 ・2回:天然有機化合物の抽出および単離精製方法(1) ・3回:天然有機化合物の抽出および単離精製方法(1) ・4回:構造解析(1) ・5回:構造解析(2) ・6回:天然物を標的とした生物活性の測定(1) ・7回:天然物を標的とした生物活性の測定(2) ・8回:生活習慣病を標的とした天然物の薬効解析法 	
基礎薬学領域科目	選択科目	代謝制御学特論	<p>生体微量成分である金属元素やビタミンは、生体内の代謝や恒常性に重要な機能を果たしている。これらの生体微量成分の種類と特性を把握し、代表的な微量生体成分の機能、疾病や医薬品との関連性を理解する。</p> <p>(担当教員:20 廣村 信/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:生体金属元素の代謝学(総論) ・2回:栄養素からシグナル分子への転換 ・3回:生体金属元素は薬になるか? <p>(担当教員:5 村山 恵子/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4回:ビタミンの種類と生理機能 ・5回:ビタミンの生合成と代謝制御 ・6回:ビタミンによる生体制御と医薬品への応用 <p>(担当教員:20 廣村 信、5 村山 恵子/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・7回:生体微量成分の機能と創薬について論文調査またはSGD ・8回:生体微量成分の機能と創薬について発表及び討議 	オムニバス方式
基礎薬学領域科目	選択科目	分子病態解析学特論	<p>ヒトゲノム情報が解読され、感染症・がん・生活習慣病など多くの疾患に遺伝子が関与することが明らかになってきた。またそれに伴う生体機能の理解や疾病の病態生理研究の進歩により、新しい医薬品、特に生物学的製剤や分子標的薬が開発・臨床応用され、高い治療効果を上げている。本特論では、生体を遺伝子や蛋白質などの分子機能から理解しながら、疾患の病態生理学を含めて分子標的薬を含むがん薬物療法に関する最新の知見について学ぶ。</p> <p>(担当教員:16 炬口真理子/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:がんバイオマーカー ・2回:生物学的製剤・分子標的薬とは ・3回:抗悪性腫瘍薬・白血病治療薬 ・4回:白血病治療薬 <p>(担当教員:21 小川和加野/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回:感染経路別感染対策・ワクチンによる感染予防 ・6回:抗菌薬の適正使用・临床上問題となっている耐性菌とその対策 ・7回:院内感染対策の法律と制度 ・8回:感染制御における薬剤師の役割について 	オムニバス方式
基礎薬学領域科目	選択科目	生体物理化学特論	<p>様々な病態における創薬標的の探索や創薬シーズの発掘を指向した最先端の基礎研究を推進する上で、物理化学的な実験手法や解析手法は非常に有用である。生体内の酸化還元(レドックス)はほとんどの病態への関与が示唆されており、診断のバイオマーカーや創薬標的の候補となりうる。そこで、本講義の前半では、生体内のレドックス恒常性やその破綻と病態発症との関連について概説し、生体レドックスの磁気共鳴原理に基づく評価法について学ぶ。また、生体に含まれる多くの金属イオンは生体内の酸素濃度やレドックスに関与している。そこで、本講義の後半では、金属イオンを含有する、いわゆる金属タンパク質の生体内での役割とその物理化学的な性質の測定法や金属イオンを利用した酸素濃度の測定法について概説する。</p> <p>(担当教員:19 安川圭司/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:生体レドックス総論 ・2回:磁気共鳴法の原理と生体レドックス評価(1) ・3回:磁気共鳴法の原理と生体レドックス評価(2) ・4回:病態モデル動物を用いた生体レドックス解析例 <p>(担当教員:18 田島健治/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回:金属タンパク質の機能と役割(1) ・6回:金属タンパク質の機能と役割(2) ・7回:金属タンパク質の反応機構の解析法 ・8回:金属錯体を利用した細胞内酸素濃度測定 	オムニバス方式

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

授 業 科 目 の 概 要			
(薬学研究科博士課程)			
科目区分	授業科目の名称	講義等の内容	備考
臨床薬学領域科目	選択科目 臨床衛生薬学特論	<p>普段の食習慣・生活習慣や生活環境要因によって引き起される肥満、脂質異常症、高血圧、糖尿病、アレルギー性疾患等の様々な疾病の発症に関する基本的な知識を習得させる。また、その詳細な発症機序と最新の知見に基づいた病態の分子レベルでの制御と疾病の発症予防について理解することを目的とする。</p> <p>(担当教員:2 戸田晶久/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:食習慣・生活習慣及び生活環境要因による疾病の発症とその予防 ・2回:食品成分及び天然物成分による病態発症とその予防 ・3回:化学物質の代謝的活性化による病態発症機序 ・4回:食品成分・天然物成分と医薬品との相互作用 <p>(担当教員:24 副田二三夫/4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回:生活環境因子による病態の発症とその予防 ・6回:環境化学物質による病態の発症とその予防及び改善 ・7回:中枢神経疾患に対する環境因子の影響 ・8回:中枢神経疾患に伴う排尿機能障害の発症とその予防及び改善 	オムニバス方式
臨床薬学領域科目	選択科目 臨床生薬学特論	<p>生薬学には、生薬学ならではの研究手法としてフィールドワークが挙げられるが、「フィールド」には薬用植物が生育する野山や畑という意味であるとともに「現場」という意味もあり、病院や薬局という医療現場とラボを往復するフィールドワークという生薬学の研究スタイルが存在する。また、生薬に関しては、臨床経験的なものだけでなく、実験薬理学的な情報についてもこれまで膨大な医薬品情報が蓄積されているが、それが実際に医療現場に応用できるものであるかどうかは、ケースバイケースで判断していかなければならないのが現状である。本講義では、漢方薬の原料として主に使用されている代表的な生薬について、臨床現場に対して反映できる情報を選択し、それを理解することを目的とする。</p> <p>(担当教員:13 森永 紀/8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回:漢方処方に配合される生薬の役割 ・2回:中医学における生薬の理論 (1) ・3回:中医学における生薬の理論 (2) ・4回:生薬含有成分の薬物動態 (1) ・5回:生薬含有成分の薬物動態 (2) ・6回:生薬における医薬品情報学 (1) ・7回:生薬における医薬品情報学 (2) ・8回:健康食品(サプリメント)として使用される生薬への対応 	
臨床薬学領域科目	選択科目 臨床応用薬理学特論	<p>病態生理学を理解した上で、薬の作用機序について、理論的な理解を深める。特に、生理活性脂質が関与するアレルギー疾患、炎症性疾患、筋変性疾患を中心に、病態特異的な薬物治療標的分子および関連バイオマーカー、コンパニオン診断薬、さらに治療の実際について概説する。加えて、標的分子(酵素タンパク質)の立体構造情報に基づいて、理論的に治療薬を分子設計、スクリーニングされた創薬の実例を交えて解説する。</p> <p>(担当教員:6 有竹 浩介/全8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> 1回 病態生理学基礎 I 2回 病態生理学基礎 II 炎症疾患、創傷病態の進展と治療 3回 臨床応用薬理学 I アレルギー疾患のバイオマーカーと薬物治療 4回 臨床応用薬理学 II アレルギー疾患薬とコンパニオン診断薬 5回 臨床応用薬理学 III 炎症性疾患のバイオマーカーと薬物治療 6回 臨床応用薬理学 IV 炎症性疾患治療薬とコンパニオン診断薬 7回 臨床応用薬理学 V 筋変性疾患のバイオマーカーと薬物治療 8回 臨床応用薬理学 VI 筋変性疾患治療薬とコンパニオン診断薬 	

臨床薬学領域科目	選択科目	臨床薬物治療学特論	<p>薬物治療におけるアドヒアランス向上のためには、患者の行動変容が不可欠となる場合がある。本講義では、中枢神経の構造と機能が、どのように行動変容と関連しているのかについて学習する。精神疾患（不安障害や気分障害）、薬物依存などの報酬行動異常などに関して、脳内のカテコールアミンに着目して解説する。また、肥満・2型糖尿病の危険を高める食行動の異常についても、脳内報酬系におけるカテコールアミンに着目した最新の研究成果を紹介する。さらに、学習理論を基礎とする認知行動療法を精神薬理学的視点から捉え直し、その有効性や限界に関して議論する。授業は教員からの一方向ではなく、学生への質問や学生からの質問を受けながら双方向的に行う。</p> <p>(担当教員:7 小山進 / 5回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：総論 ・2回：ドパミンと薬物依存 ・3回：ドパミンと食行動異常 ・4回：カテコールアミンと認知行動療法 ・8回：総合討論 <p>(担当教員:28 山脇洋輔 / 4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回：セロトニン・ノルアドレナリンと不安 ・6回：セロトニン・ノルアドレナリンと気分 ・7回：カテコールアミンと学習 ・8回：総合討論 	オムニバス方式
臨床薬学領域科目	選択科目	臨床薬剤設計学特論	<p>近年多用されてきているペプチド医薬品は、従来の低分子医薬品とは異なる分子間相互作用・薬物送達の考え方が必要である。医薬品分子は分子・細胞・組織・臓器との相互作用により、物質移動やシグナル伝達を惹起する。この生体膜内外の物質移動やシグナル伝達の多くは、「界面」を介して行われるため、医薬品分子と膜タンパク質、リン脂質、コレステロール、或いはこれらの複合体（ラフト構造）との相互作用を分子レベルで理解することは、医薬品の適正使用（体内動態や薬理作用）にとって非常に重要である。本特論では、医薬品の重要な標的場である「界面」で引き起こされる様々な薬物-分子間相互作用の理解を深め、疾患に対する新規医薬品・薬剤の適切な設計、開発、そして評価ができる能力を培う。</p> <p>(担当教員:15 今井輝子 / 4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：薬物代謝酵素の構造・機能解析による薬剤設計法の確立（1） ・2回：薬物代謝酵素の構造・機能解析による薬剤設計法の確立（2） ・3回：ドラッグデザインと薬物の腸管吸収モデルの関連性（1） ・4回：ドラッグデザインと薬物の腸管吸収モデルの関連性（2） <p>(担当教員:24 中原広道 / 4回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・5回：界面科学的知見による生体膜モデルと医薬品の相互作用 ・6回：難溶性医薬品の易溶化とバイオアベイラビリティの改善 ・7回：呼吸窮迫症候群(RDS)の発症機構と薬物療法（1） ・8回：呼吸窮迫症候群(RDS)の発症機構と薬物療法（2） 	オムニバス方式
臨床薬学領域科目	選択科目	臨床薬物動態学特論	<p>医薬品の体内動態は、種々の要因によって多様に変動する。本講義では、臨床における薬物動態の変動要因を把握するために、飲食物やサプリメントを含めた薬物間相互作用や生理的要因（遺伝子多型、年齢、妊娠など）および病態時の薬物動態変動の機序について最新の知見を収集し、臨床での薬物動態について理解を深める。さらに、医療用医薬品の個別化医療や安全性を含めた医薬品適正使用について考察する。</p> <p>(担当教員:4 入倉充 / 8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1回：薬物動態の統合的把握 ・2回：薬物間相互作用（1） ・3回：薬物間相互作用（2） ・4回：薬物間相互作用（3） ・5回：個別化医療のためにTDM・投与設計 ・6回：薬物動態の変動要因（1） 個体差・人種差 ・7回：薬物動態の変動要因（2） 食事と生活習慣 ・8回：薬物動態の変動要因（3） 妊娠および病態時 	

臨床薬学領域科目	選択科目	臨床薬物送達学	<p>創薬モダリティの多様化により、低分子医薬からペプチド、タンパク質（ホルモン、サイトカイン、抗体、抗原など）、抗体薬物複合体、核酸医薬、遺伝子医薬、細胞医薬、組織医薬、マイクロ・ナノデバイスなどの開発が進んでいるが、それらの有効性及び安全性を高めるために、薬物を最適な時間、必要な期間、必要な場所に、最適な速度で、安全に届けるためのドラッグデリバリーシステム（DDS）への期待が高まっている。本講義では、これら創薬モダリティに活用されている最新のDDSについて解説する。</p> <p>(担当教員:12 有馬英俊/8回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1回：低分子医薬に対するDDS（1）放出制御、吸収促進、プロドラッグなど ・ 2回：低分子医薬に対するDDS（2）ターゲティングなど ・ 3回：ペプチド・タンパク質（抗体以外）医薬に対するDDS ・ 4回：抗体医薬に対するDDS ・ 5回：核酸医薬に対するDDS ・ 6回：遺伝子医薬に対するDDS ・ 7回：細胞医薬・組織医薬に対するDDS ・ 8回：ITおよびAIを活用したDDS 	
臨床薬学領域科目	選択科目	地域医療薬学特論	<p>高齢化社会に対応するため、高齢者の尊厳の保持と自立生活の支援の目的のもとで、可能な限り住み慣れた地域で、自分らしい暮らしを人生の最期まで続けることができるよう、地域の包括的な支援・サービス提供体制（地域包括ケアシステム）の構築が進められている。薬剤師は地域の課題に合わせて、在宅、かかりつけ薬局などを通して薬学的管理を提供する必要がある。本講義では、地域における課題とそれに対する対応策を学び、地域医療に貢献するための能力を修得する。</p> <p>(担当教員:8 窪田敏夫/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 1回 日本における医療の現状と課題 ・ 2回 世界における医療の現状と課題 ・ 3回 薬局薬剤師による薬学的管理の成果について <p>(担当教員:22 大光正男/3回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 4回 地域における薬局の役割① ・ 5回 地域における薬局の役割② ・ 6回 地域における薬剤師の役割③ <p>(担当教員:17 首藤英樹/2回)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 7回 地域における調査研究① ・ 8回 地域における調査研究② 	オムニバス方式

(注)

- 1 開設する授業科目の数に応じ、適宜枠の数を増やして記入すること。
- 2 私立の大学若しくは高等専門学校の収容定員に係る学則の変更の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合、大学等の設置者の変更の認可を受けようとする場合又は大学等の廃止の認可を受けようとする場合若しくは届出を行おうとする場合は、この書類を作成する必要はない。

学校法人都築学園 設置認可等に関わる組織の移行表

令和2年度	入学 定員	編入 学 定員	収容 定員	→	令和3年度	入学 定員	編入 学 定員	収容 定員	変更事由
第一薬科大学					第一薬科大学				
薬学部					薬学部				
薬学科	113	-	678		薬学科	113	-	678	
漢方薬学科	60	-	360		漢方薬学科	60	-	360	
看護学部					看護学部				
看護学科	80		320		看護学科	80		320	
(計)	253	-	1,358		(計)	253	-	1,358	
					第一薬科大学大学院				大学院の設置 (認可申請)
					薬学研究科薬学専攻	3	-	12	博士課程4年
					(計)	3	-	12	
日本薬科大学					日本薬科大学				
薬学部					薬学部				
薬学科	260	-	1560		薬学科	260	-	1560	
医療ビジネス薬科学科	90	-	360		医療ビジネス薬科学科	90	-	360	
(計)	350	-	1,920		(計)	350	-	1,920	
日本薬科大学大学院					日本薬科大学大学院				
薬学研究科薬学専攻	3	-	12		薬学研究科薬学専攻	3	-	12	
(計)	3	-	12		(計)	3	-	12	
神戸医療福祉大学					神戸医療福祉大学				
人間社会学部					人間社会学部				
社会福祉学科	120	-	480		社会福祉学科	120	-	480	
健康スポーツコミュニケー ション学科	150	-	600		健康スポーツコミュニケー ション学科	150	-	600	
経営福祉ビジネス学科	130	-	520		経営福祉ビジネス学科	130	-	520	
(計)	400	-	1600		(計)	400	-	1600	
専門学校第一自動車大学校					専門学校第一自動車大学校				
自動車整備学科	145	-	300		自動車整備学科	145	-	300	
(計)	145	-	300		(計)	145	-	300	
東京マルチメディア専門学校					東京マルチメディア専門学校				
専門課程	265	-	525		専門課程	265	-	525	
(計)	265	-	525		(計)	265	-	525	
関東リハビリテーション専門学校					関東リハビリ専門学校				
理学療法学科	40	-	120		理学療法学科	40	-	120	
作業療法学科	40	-	160		作業療法学科	40	-	160	
(計)	80	-	280		(計)	80	-	280	

福岡天神医療リハビリ専門学校			
理学療法学科	40	-	120
作業療法学科	40	-	120
鍼灸学科	30	-	90
柔道整復学科	30	-	90
<hr/>			
(計)	140	-	420
お茶の水はりきゅう専門学校			
はり師きゅう師学科	56	-	168
<hr/>			
(計)	56	-	168
名古屋未来工科専門学校			
工業実務専門課程	160	-	320
<hr/>			
(計)	160	-	320

→

福岡天神医療リハビリ専門学校			
理学療法学科	40	-	120
作業療法学科	40	-	120
鍼灸学科	30	-	90
柔道整復学科	30	-	90
<hr/>			
(計)	140	-	420
お茶の水はりきゅう専門学校			
はり師きゅう師学科	56	-	168
<hr/>			
(計)	56	-	168
名古屋未来工科専門学校			
工業実務専門課程	160	-	320
<hr/>			
(計)	160	-	320

→

→